「一流」とは何か

この間、わが学園生え抜きの教員が某大手ベンダーから引き抜きの誘いを受けた。本人は、結構うれしそうに、「これは芦田さんには内緒にしてね、と言われたんですけどね」だって。情けないことだ。そう言われてひるんだ瞬間、このわが校教員は、本当の意味で「二流」の人間に成り下がったわけだ。私は、なぜ、「あなたこそ、わが学園で一緒に私と働きませんか」とすぐさま言い返せなかったのか、とその教員をしかりつけた。「情けないね」とも。

うさんくさい「出世」をする人の特徴

私は、こういった問題は「一流問題」と呼ぶことにしている。一人の人間が、こつこつと努力してそれが認められてメジャーになる。いわゆる「出世」。これはよくあることだ。たとえば、お笑いの西川きよしが「出世」して国会議員になる。お笑いのたけしが「出世」して映画監督になる。同じくお笑いの島田紳助が「出世」してニュースキャスターになる。しかしこういった「出世」はどことなくうさんくさい。

たとえば同じ芸人でもタモリや明石家さんまは、こういった「出世」の仕方を拒んでいる。彼らは「出世」したからといって、「国会議員」や「知識人」「文化人」にはならない。要するに芸人としては（あるいは思想家としても）タモリや明石家さんまの方が遥かに優れている。こういった違いはどこから出てくるのだろう。

西川きよしもたけしも紳助も自分にコンプレックス（現在の自分を否定的に考える性向 ―この性向の究極がキリスト教の「原罪」というもの）があるのだろう。自分にコンプレックスがあるということの意味は何か。自分の存在の評価を他者による評価によって測ろうとすることだ。他人に褒められると自分を過度に甘やかし、他人が非難すると極端に自信喪失する。自分で自分のしていることを評価できない。褒められても簡単には納得しない、けなされても落ち込んだりはしない、そういった自己評価ができない。自己評価することができないと通俗的な既成の世界秩序（＝世間）に頼らざるを得なくなる。

かつて、島田紳助は、松本人志と深夜番組（日本テレビ）で対談する番組をレギュラー化していたが、紳助の、松本へのこのすりよりは見ていられないほど悲惨なトークを露呈している。それはたけし軍団を侍らせ、面白くもないトークを連発するたけしと同じ悲惨さだ。

漫才師よりは国会議員、知識人、文化人。ジャーナリストよりは大学教授。学歴や部長、重役といった肩書き。小さい会社よりは大きな、有名な会社などなど。こういった悲惨な秩序は蔓延してい

(C)ASHIDA Hironao 無断複製を禁じます

る。もちろん最初から社長であったり、最初から文化人であったりすることなどできないから、こういったことを気にし始めるといつもコンプレックスで悩まされることになる。大きな会社から誘いを受けたり、多額の給料を提示されたり、芥川賞を取ったりしたら、急に偉くなったような気になって態度が変わり始める。いったいこれはどういうことか。

そういった社会性は、一人の人間にとってはいつでも偶然だ。社会的な不遇も、厚遇も、理由をつけようと思えばいくらでもつけることができそうだが、ほとんど嘘だ。人は偶然出世し、偶然落伍する。それが〝社会〟観の究極の認識だ。つまり社会評価は、評価にはならない。

どんな〈現在〉にも有利、不利はない

そもそも社会的な頂点というものはいつでも没落の始まりでしかないし、没落は、また新生の始まりでもある。横綱になってから強くなる「千代の富士」みたいな力士もいるし、勝ち続けていても強くない「巨人」のような野球もある。それが「社会」というものだ。

〈評価〉とは、そういった「社会」から限りなく遠ざかることだ。「王様は裸だ」と言うことのできる力を持つことだ。何が没落の兆候であり、何が新生の始まりであるのかを見極める力を持つことだ。このことは、〈現在〉の自分の社会性とは何の関係もないことである。というのも〈現在〉とは、没落と新生との交点だからだ。

どんな企業も最初から大企業であったことはない。どんな企業も永遠に大企業であることはない。同じようにどんな〈人物〉も生まれたときから天才であるわけでもなければ、永遠に天才であり続けたわけでもない。大概の個人（天才）は、死ぬ何年も（何十年も）前から衰退しているし、逆に死ぬ数年前に「有名」になる人もいる。企業の成長、個人の成長は、どんな生理や有機体とも類似のない仕方で盛衰を繰り返している。

したがって、どんな〈現在〉にも不利、有利、二流、一流ということはない。〈現在〉は、差別なく平等に（没落に向かっても、新生に向かっても）与えられている。この〈現在〉が自己評価の源泉だ。たった一人の自分だけが自分の支持者にすぎないことが、世界を魅了する天文学的な支持量となって現れることの始まりであるのかもしれないし、そしてその時点こそが、現在「である」かもしれないことを誰も拒むことはできない。

むろんこのことは、憶測であり、経験的な憶測である。憶測ということで言えば、たった一人の自分だけでの支持に終わりそうな無数の世界性が世界史のあちこちに埋もれているかもしれないということも、拒み得ない憶測のもう一つである。

私の〈現在〉の緊張に耐えうること、これが〈歴史〉というものだ。〈歴史〉とはどんな必然性や因果とも無縁な概念である。自分の近傍に天才や一流を見出せない人間に、どんな評価が可能だろうか。自分の〈現在〉に世界史を見出せない人間に、どんな上昇が可能だろうか。

（初出・二〇〇一年四月一七日）

(C)ASHIDA Hironao 無断複製を禁じます

就職活動、出陣の言葉――できるだけ大きな企業を目指しなさい

先々週の金曜日（就職指導プログラムの期間）は久しぶりにＷＥＢプログラミング科の学生の前で話をした。春のフレッシュマンキャンプ以来だ。

内容は、就職活動を開始する君たちへ、というもの。専門学校は二年課程が多い。したがって、就職活動は学校へ入学して半年足らずで開始しなければならない。特に大学生（一流大学の大学生）と本気で戦うには、大企業が採用活動を開始する一〇月は勝負時なのである。

それは遥かにハンディを背負った活動開始である。大学生は三年生の一〇月。専門学校生は一年生の一〇月。一流大学に在籍してようが、三流大学に在籍してようが、この年代の二年間はどんな学生だって大きく成長する時期で、三年生は一年生に比べて遥かに大人の落ち着きがある。

だから、ほとんどの専門学校の就職活動は、この時期には開始しない。一流企業の、一流大学三年生の採用が一巡する春先が専門学校の就職活動が本格化する時期なのである。一年生の一〇月に就職活動を開始する専門学校なんて、日本中どこを探しても存在しない。三年生の大学生に勝てないからだ。「専門学校は（大学に比べて）就職がいい」というのはウソだ。それはそもそも大学生がもともと

相手もしない企業への就職率がいいと言っているだけで、同じ土俵で優劣を競っているわけではない。しかも最近では、大卒の就職落ちこぼれ組が旧来の専門学校就職域まで降りて来ているために専門学校（専門学校生）の就職率はどんどん落ちてきている。

若いうちはできるだけ大きな企業を狙いなさい

こんな状況の中で、私は次のような話を学生諸君に行った。

まず、みなさん、できるだけ規模の大きな企業への就職を目指しなさい。それは中小企業は良くないという意味ではなくて、まずは大きな企業で学ぶべきことを学びなさいという意味です。大きな企業があなたたちの終点や理想であるわけではありません。

理由は二つあります。

第一の理由。

大きな企業は、人材評価を複数の系列から汲み上げるノウハウを有しています。直属の上司と折り合いが悪くても必ず直属の上司共々評価の対象にする仕組みを有しています。したがって、人間関係で失敗する可能性が少ない。

小さな会社は、トップの顔が見え、動きも速くて快適なように見えますが、一度上司（あるいは社長）とうまくいかなくなったら評価を取り返すのに大変な努力が必要になる。これは若いあなたた

(C)ASHIDA Hironao 無断複製を禁じます